

トライアスロンにおける競技中の傷害 — 近畿地区における過去7年間のデータから —

○笠次 良爾¹⁾, 梅垣 裕²⁾, 清成 則久³⁾

¹⁾ 奈良教育大学 整形外科, 日本トライアスロン連合メディカル委員会

²⁾ 梅垣麻酔科クリニック

³⁾ 清成外科内科医院

【目的】

トライアスロンにおける競技中の傷害ならびに疾病の発生頻度について示すこと

【対象】

2003～2009年に近畿地区で開催されたトライアスロン大会のうち、36大会の出場選手6520名である。トライアスロンはオリンピックディスタンス(51.5km)、スプリント(24.75～28.75km)、初心者(12.8km)、キッズ・ジュニア(2.3km～12.8km)を対象とした。

【方法】

選手をカテゴリー(エリート, 学生選手権, 一般, スプリント, 初心者, キッズ・ジュニア)で分類, 傷害・疾病発生頻度を1000 athlete-exposuresで算出しカテゴリー間で比較した。

【結果】

傷害・疾病は計269例発生した。頻度は1000 athlete-exposures(95% CI)で示す。エリート163.79(116.17, 211.42), 学生選手権129.50(73.68, 185.31), 一般53.52(41.32, 65.71), スプリント36.18(28.25, 44.12), 初心者8.29(1.05, 15.53), キッズ・ジュニア28.91(21.76, 36.06)であった。エリート, 学生選手権, 一般は全て51.5kmであったが, 一般に比べエリートは約3倍の発生頻度であった。特に熱中症はエリートで頻度が高く, 一般の18.3倍を示した。

【考察】

エリートは強度が高くドラフティングが許可されているため, 熱中症などの疾患, 落車による傷害いずれも高値であると思われた。